文化と社会階層の多重対応分析
――2015年SSMデータを用いて――

○慶應義塾大学　磯直樹
上智大学　竹ノ下弘久

１．目的

本報告では、現代日本における文化と社会階層の関係を明らかにすることを目的とし、1995 年と 2015 年の SSM データを用いた計量分析を行った上で、理論的考察を行う。理論的関心の背景にある研究は、主にブルデューの『ディスタンクシオン』やベネットらの『文化・階級・卓越化』である。1995 年 SSM 調査は、他の SSM 調査と比較して文化関係の質問項目が最も多い。他方、最新の 2015 年 SSM データにも同様の質問項目があるものの、1995 年 SSM よりは少ない。本報告では, これら二種類のデータを両方用い、両者を対照させながら分析する。このことにより、最新のデータから分かることを確認するとともに、両者の差異についても考察する。

２．方法

2015 年 SSM データから「文化」に関わる質問項目のデータを用い、社会階層との関係を多重対応分析によって分析する。文化活動、文化的嗜好、ライフスタイルに関わるデータを分析することで、それぞれの項目が社会階層とどのような関係にあり、それらの項目の中でどのような差異の体系があるかを確認する。次に、1995 年 SSM データと 2015 年 SSM データとの比較を行う。比較に際しては、文化と階層との関連についての時代に伴う変化だけでなく、2 つの調査における質問項目の違いが、分析結果にどのような異同をもたらしているのかも、確認したい。具体的には、1995 年 SSM データとの比較を行うために、2015 年 SSM データと同じ質問項目のみを選んで 1995 年 SSM データの分析を行う。続けて、後者のデータを用い､2015 年 SSM データと同じ質問項目のみを用いる場合と 12 の質問項目全てを用いる場合とで、どのような差異が見られるかを考察する。

以上の分析を踏まえ、文化と階級という観点からイギリスやフランスとの国際比較を可能にするために必要な調査について、理論的な考察を行う。1995 年と 2015 年の SSM データの分析結果を踏まえ、ブルデューが想定する「界」の存在について、理論的考察を行い、文化と社会階層についての今後の研究に向けての展望を論じる。

３．結果

学歴、職業、ジェンダーにより、文化活動と文化的嗜好に関する傾向が見られることを確認できた。加えて、文化と階級の国際比較を行うにあたって必要な調査の方法についても具体的な示唆を得られた。

４．文献

Bourdieu, P., 1979, *La distinction : critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit.（=1990, 石井洋二郎訳,『ディスタンクシオン』1-2, 藤原書店）

Bennett, T. et al., 2009, *Culture, Class Distinction*, Routledge.（=2017, 磯・香川・森田・知念・相澤訳,『文化・階級・卓越化』, 青弓社）